

主論文の要約

論文題目：Urban Pastoralism in Theodore Dreiser's Works

(セオドア・ドライサー作品における都市的パストラリズム)

氏名：土屋 陽子

19世紀から20世紀の世紀転換期、急激な都市化が進むアメリカ社会において「都市」と「田舎」の関係は都市社会に生活する人々が考えるべき深刻な問題の1つであった。当時人々は概して、「都市」の示す新しい価値観と「田舎」の示す「牧歌」的な価値観の対立を懸念する一方で、両者の相互的な関係性、つまり都市と牧歌の共存、を理想として抱いていた。都市化するアメリカ社会における「都市」と「牧歌」の共存に対する理想は、都市的パストラリズム (urban pastoralism) として当時のアメリカ都市小説の中でも大きなテーマの1つとして扱われている。

本研究の目的は、当時活躍した、アメリカの代表的な自然主義作家で、都市小説家としても知られるセオドア・ドライサーの長編小説の中に「都市」と「牧歌」の関係が如何に示されているかを読み取り、ドライサー自身の都市的パストラリズムに対する見解を考察することにある。

ドライサーはその著作を通じ、主にシカゴやニューヨークといったアメリカの大都会を舞台に、人々の生活と社会の現状をありのままに描いた作家である。生涯を通し、3部作を含め8編の長編小説を執筆するが、そのほとんどにおいて世紀転換期におけるアメリカの都市社会が舞台となっており、都市が物語の重要な要素の1つとして扱われている。これまで度々指摘されてきたように、彼の作品には都市社会で生きることに對する人々の希望と失望、理想と現実、成功と墮落が描かれており、それらの間で翻弄される人間の意志の無意味さと社会の残酷さが描かれている。それ故、ドライサーを都市小説家として認識し彼の都市描写が示す反道徳性を検証するという傾向が、従来のドライサー研究では主流であった。しかし、世紀転換期の都市を描く作品を読む際、その対極となる自然の描写についても無視することは出来ない。そこで本研究では、3部作の3作品目で晩年の作品である『禁欲の人』を除く、ドライサーの全ての長編小説を取り上げ、都市的パストラリズムがそれぞれの作品の中で如何に示されているかを論じた。故、本研究の独自性は、ドライサーのほとんど全ての長編小説を取り上げ、従来のドライサー研究では注目されることの少なかった、「牧歌」、あるいは「自然」の描写に着目したという点にある。

本論文は序論、結論に加え6章から構成されている。第1章、第2章では、それぞれ『シスター・キャリー』、『ジェニー・ゲアハート』を扱う。これらの作品は共に田舎

から都会に働きにやって来た若い女性の視点から都市社会を描いた作品である。第1章では、主人公キャリアの背後に潜む、彼女の故郷である田舎町、コロンビアシティーの存在に着目し、都市小説の代表作として知られる『シスター・キャリア』の中にも「田舎」の面影が描かれていることを明らかにする。本作品において都市に対する田舎の存在は一見ドライサーにより排除されているかのように見える。しかし、作品の中にあるコロンビアシティーに関する言及に着目しながら本作品を読むと、作品を通して田舎の存在がキャリアの描写と関連しながら描かれていることが分かる。また、作品の中に度々登場する揺り椅子に着目すると、揺り椅子がキャリアに中間的なイメージを与える役割を果たしていることが分かり、さらにそこには、都市的価値と牧歌的価値に挟まれた当時のアメリカ社会の不安定さも読み取ることが出来る。本章では、そのような読みをすることで、都市小説として知られる『シスター・キャリア』が、実際には田園小説としての要素も持ち、ドライサーの示す都市的パストラリズムを読み解く上での助走となっていることを指摘する。

第2章では、『ジェニー・ゲアハート』の中で主人公ジェニーが「牧歌」を表彰するものとして描かれていることを指摘し、都市と牧歌の関係が登場人物によりどのように示されているかを考察する。本作品において、ジェニーと彼女の愛人レスターの関係は牧歌と都市の関係を示すものとして寓意的に描かれている。そのように読むと本作品には、ジェニーを通して都市化していく田舎の様子が示されていることを分かると同時に、ジェニーが、レスターにとって都市社会からの逃避先として示されていることも分かる。すなわちジェニーは都市化していく田舎を表象すると同時に、理想的牧歌像も示しているのである。さらにドライサーは、そのようなジェニーを最後まで好意的に描いている。都市的パストラリズムに対するドライサーの肯定的な見解を本作品では読むことが出来る。

第3章では、全2作とは異なり社会的強者の立場にある男性を主人公に都市社会を描いた、『欲望3部作』の特に第1、2部、『資本家』と『巨人』を扱い、そこに描かれた都市と牧歌の関係を、主人公の女性関係の変遷から読み取る。本作品を都市と牧歌の問題と関連付けて読むと、都市社会を生きる資本家である主人公クーパーウッドが都市を体現するものとして、また、彼と関係する女性たちが概ね牧歌を体現するものとして示されていることが分かる。本章では主人公と関係を持つ女性たちの中でも特に重要な役割を果たしていると思われる3人の女性、クーパーウッドの最初の妻リアン、2人目の妻アイリーン、そして最後の愛人ベレナイシを取り上げ、それぞれに示される都市と牧歌の関係を考察する。そうすることで本作品には都市と牧歌の関係に対し3つの異なる見解が示されていることを明らかにし、都市的パストラリズムに対するドライサーの見解が懐疑的なものになっていることを指摘する。

第4章では、同じく社会的強者を主人公として都市社会を描く『天才と呼ばれた男』を扱い、『資本家』、『巨人』と同様、主人公を通して示される都市と牧歌の入り組んだ

関係と、当時の社会の不安定な状況を読み取り、ドライサーの都市と牧歌の共存に対する懐疑的な見解を指摘する。本作品には、主人公ユージーンの、「芸術」と「商業」の間における葛藤と、女性問題を巡る「因習的価値」と「都会的価値」の間における葛藤とが相互に関連しながら描かれており、それらの関係性に「都市」と「牧歌」の関係を読み取ることが出来る。本章では、本作品における都市と牧歌の関係を「都市（主人公、あるいはその愛人により示される）/ 商業」対「牧歌（主人公の妻アイリーンにより示される）/ 芸術」という図式で捉える。さらに、「牧歌/ 芸術」の項の中にも対立する関係が生まれていることに着目し、そこに、芸術界にまで及ぶ都市化の影響が示唆されていることを考察する。そうすることでドライサーが、『欲望3部作』で描いた都市と牧歌が混在する都市社会の不安定な状況と都市的パストラリズムに対する自身の懐疑的な見解を、本作品においては芸術という文化的側面も取り入れながら改めて示したことを指摘する。

第5章で取り上げる『アメリカの悲劇』では、ドライサーは視点を都市の郊外へ向け、寓意的というよりもむしろ、郊外における自然の都市化そのものを描いている。本章では、都市化が自然空間を舞台にどのように描かれているかを検証し、都市的パストラリズムに対するドライサーの比較的否定的な見解を読み取る。本作品の中でドライサーは、これまで文学の中で神聖なものとして描かれることの多かった湖を舞台に主人公クライドの起こす悲劇を描くことで自然社会の都市化を示すと同時に、地方社会に依然残る慣習も湖の描写と関連付けながら示している。都市化の影響を受ける地方社会の不安定な実態を湖を介し示しているのである、そして、地方社会を舞台に都市化を描き、そこに生じる問題を暴くことで、都市と牧歌の共存に対する彼自身の否定的な見解も示しているのである。

都市と牧歌の共存に対する否定的な見解は、第6章で取り上げるドライサーの最後の長編作品『とりで』の中でより一層明らかとなる。ドライサーの死後出版された『砦』は、敬虔なクエーカー教徒である主人公ソロンの生涯を中心に、その一家の生活を描いた作品である。宗教をテーマとした内容と、人生の悲劇を経験したソロンが自然の中に絶対的な神の存在を再認識し、世俗的な世界から一切縁を切るという作品の結末から、一般的に本作品は、自然主義作家ドライサーらしからぬ宗教的で保守的な作品であると指摘されている。しかし、本作品も作品の背景となるのは、他の作品と同様資本主義社会であり、都市的価値と牧歌的理想の対立関係が大きなテーマとなっている。本章では、その対立関係が、信仰を重んじるソロンと華やかな世界に影響を受ける子供たちとの対立に示されていることに注目する。そして、牧歌的な理想主義に基づくバーンズ家の精神が、都市的な物質主義に基づく時代の精神と対立していることを指摘する。次に、その対立に介入し、別の世界への扉となって時代の精神を子供たちに伝える役割を果たしている2人の叔母、ヘスターとローダの存在に着目する。そうすると、ドライサーがこれまで牧歌を象徴するものとして描いてきた女性を、本作品の中では都市化を推進して

いくものとして描いていることが分かる。特にヘスター叔母は、当時の女性社会運動家を思わせるような描写がされており、さらに作品を通し最後までソロンに影響力を及ぼしている。つまり本作品においてドライサーは、女性であるヘスター叔母を通して絶対的な都市化の力を描いているのである。都市化によって作られた新しい社会構造が本作品には描かれていることが分かる。本章では、その様に本作品を読むことで、『とりで』を保守的な作品であると考えた従来の解釈とは異なる読みを提示し、本作品こそ都市化する社会をありのままに描こうとしたドライサーの自然主義的見解が見られることを指摘する。

本研究の結論としては、次の2点が挙げられる。まず、都市描写を通して反因習的見解を示したと解釈されることの多いドライサーが、実は自然の持つ牧歌的価値にも重要性を見出しており、都市小説家として捉えられてきた彼の作品の中にも牧歌的要素が見られるということである。そして、それぞれの作品における都市と牧歌の関係性の描写の変化からは、ドライサー自身の、都市的パストラリズムに対する見解の変化を読み取ることが出来る。当初は都市と牧歌の共存に対して肯定的な見解を示していながらも、その見解は次第に懐疑的なものとなり、晩年においては、避けることのできない都市化の影響力を認めざるを得なくなったことが読みとれるのである。都市小説家と言われるドライサーではあるが、都市のみならず、都市と牧歌の関係性を多様な視点から捉えたドライサーの作品こそ、世紀転換期の都市化するアメリカ社会における都市的パストラリズムを理解するのにまさに適しているのである。